

ムシロガイ *Nassarius livescens* (Philippi)

【選定理由】

本種は内湾からやや外洋にかけての干潟から潮下帯砂泥底にすむ。県内では内湾域の干潟から潮下帯の環境は急速に悪化して、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種もかつては三河湾から伊勢湾にかけて普通に生息していた(愛知県科学教育センター, 1967)が、近年急速に生息場所、個体数共に激減し、生貝が全く採集されない(木村, 1996; 木村, 2000)期間も長かった。2006, 2007年の現地調査において渥美半島先端部伊良湖岬周辺のアマモ場で健全な個体群を確認し、三河湾島嶼域の調査でも生貝が確認できるようになった。特に佐久島では健全な個体群が確認された(早瀬・木村, 2020)。明らかな回復傾向が認められたので、前回(VU)よりランクダウンすべき種と評価された。

【形態】

殻長約 20 mm の卵形の貝で、殻は厚く、太く低い縦肋があるが、細い螺溝で横切られ、石畳状になる。殻口は丸く、内唇側に白い滑層が発達する。

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように県内の内湾域では、近年生貝が比較的広い範囲の海域で採集されるようになり、佐久島(早瀬・木村, 2020)や伊良湖周辺(木村, 2017)では健全な個体群も認められ、明らかな回復傾向が確認されている。

【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陸、フィリピン、熱帯インド、西太平洋。国内では大槌湾～九州に分布する(福田, 2012)。本種はインド・太平洋の熱帯域まで分布するとされているが、各地の標本を検討する限り日本(本州から九州)産個体とは明らかに殻形態に差があり、分類学的な再検討が必要である。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような生息環境悪化のため減少していると考えられる。加えて、防汚剤に含まれる有機スズ化合物による雌の雄化(インボセックス)が生じて激減した可能性がある(福田, 2012)。近年急速な回復傾向が認められるのは、有機スズ系防汚剤の製造中止が大きな要因である可能性が高い。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

レッドデータブックなごや 2010(木村, 2010)では、本種と正しく同定された名古屋港沖産の死殻標本(図 3)が図示されていたが、レッドデータブックなごや 2015(木村 加筆 川瀬, 2015)では福井県産の本種が図示された。その地で採集された貝類の画像はレッドデータブックの重要な資料(データ)の一つなので、他産地の標本はなるべく使用しないことが望ましい。名古屋港沖の個体群は、他産地ではみられない殻が厚く殻口が著しく肥厚する特異な殻形態をしておりなおさらである。

【引用文献】

- 愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物. 222pp.
福田 宏, 2012. ムシロガイ, p. 68. in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
早瀬善正・木村昭一, 2020. 佐久島(三河湾)の潮間帯貝類相. ちりぼたん, 50 (1): 33-79.
木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20.
木村昭一, 2017. 伊良湖漁港内で採集された貝類. かきつばた, (42): 6-12.

(木村昭一)

